

新たな連携によって生まれるもの

北海道留辺蘂高等学校 校長 國井秀彦

担当者 教諭 西村元志

1. 本校のESDの特徴 ～ホールスクール・アプローチ～

本校では、ユネスコスクールに加盟した平成25年度より、各教科で授業内容の見直しをし、キャリア教育の観点とESDで求められる能力との関連づけを行ってきた。そして、学校教育全体にESD活動をより浸透させていくために、平成27年度からの分掌の改編に伴い、分掌内にESD関連の業務を組み込み、推進教員と分掌の、横断的連携を強化させながら、学校全体で効果的にESDに取り組む体制を整えている。

2. 活動・全体計画

全教職員が年度初めに一年を見通す「キャリア教育に基づくESDの全体計画」を立て、各教科・分掌・学年・特別活動の中でESDの取組目標を設定し、ESDカレンダーを作成している。それを元にして、学期末ごとに「ESDふりかえりシート」を作成・活用し、それぞれの活動を総括してあぶり出された改善点や課題を次の活動に生かしてつなげていくサイクルの工夫を行っている。

3. 活動事例

(1) ユネスコスクール間の交流 ～上士幌高校との生徒会執行部同士による交流～

平成27年11月に札幌で行われたユネスコスクール研修会で、上士幌高校と生徒会レベルでの交流をする話が持ち上がった。両校の生徒会執行部が訪問し合って、それぞれが持つ課題について話し合い、交流を深めることで、生徒会活動を活性化させて生徒自身の成長につなげられることが期待できるのではないかと考えた。

1回目は平成28年1月に、上士幌高校の生徒会執行部の生徒と担当教員を留辺蘂高校に招いて交流会を行い、同年8月には夏季休業期間を利用して、本校の生徒会執行部の生徒と教員が上士幌高校を訪問した。交流会の初めに、上士幌高校のESD担当教員がESDの現状やその意味、これからのESDに求められる役割等について講義を行った。そして、ESD活動に関わる生徒会の活動内容・成果をお互いに報告し合い、それを受けて、今後生徒会活動を通してESDをどのように進めていくことができるのかをディスカッションし、その成果を発表し合い、さらにESDへの理解を深めることができた。また、熱気球部の協力のもと、実際に熱気球をあげて空に舞い上がるという貴重な体験をすることができ、その地域の特色を肌で感じる事ができた。



## (2) 地元の中学校との交流 ～課題研究福祉ゼミによる中学校での出前授業～

本校の3年次生の総合的な学習の時間は、総合学科に設定されている課題研究であり、生徒が、興味・関心を持った内容のゼミを選択して学んでいる。その中で、福祉ゼミが今年度の研究テーマとして「地域福祉の活性化」を設定し、地元の中学校2校で福祉の出前授業を行った。これは、活性化の取組内容を自分たちで考え、中学生に対して福祉の授業を行い、同時に本校の特色の一つである福祉科目の楽しさ・やりがいを中学生に知ってもらおうというねらいがある。授業の内容は、①留辺蘂町の高齢化、②認知症高齢者への理解、③高齢者スポーツ・障がい者スポーツ、④福祉科の授業紹介等の内容である。なお、この出前授業は、中学校の総合的な学習の時間に実施した。



## 4. 成果と課題

(1) については、互いの高校を訪問することで、交流会の企画・実施を生徒が中心になって取り仕切り、交流する方法を考える良い機会を得ることができた。また、生徒が主体的に各行事を運営するうえでたくさんのヒントを得ることもできた。今後とも、こういった交流を続けていきたい。

また、(2) については、福祉ゼミの生徒たちは、福祉科の授業を履修している生徒たちであり、ふだんから学んでいることを実際に中学生に教えることで、より福祉に関する理解を深め、自身の進路にも役立てることができ、中学生に本校の特色の一つである福祉科を知ってもらえる良い機会にもなった。

本校では、これまでも、幼稚園・小学校・大学・専門学校との連携を生かした授業や、「地域住民・コミュニティー」と連携した活動を行ってきた。新たにユネスコスクール間の連携・中学校との連携を加えて、生徒たちがさらに他者との「つながり」を自然に意識し、意思疎通を図り相互理解に努める態度を身につけていけると確信している。また、こうした連携を深め、さらに進んだ交流の方法を考えつづけていくことが、今後の課題になる。